

1 題材名 段落どうしの関係を読もう～「合図としるし」（学校図書3年）～

2 単元設定の背景

**教材観** 『合図としるし』は、教科書改訂後も引き続き教科書の前半に掲載されている作品である。事例後に「これらは」と指示語で分類や特徴、よさをまとめることを繰り返し、最後に「このように」で締め括るパターン化された文章構造になっている。そのため、子どもが文章構造をとらえやすく、段落の関係をつかみやすい。一方で、『合図としるし』と題名を見ただけでは、筆者が何を述べて、何を伝えようとしているのかがはっきりしない。また、どのようなものが「合図」で、どのようなものが「しるし」なのかを明確に区別していくことも難しい。そこで、言葉に着目して合図かしるしか判別しながらその特徴や果たしている役割を調べていくことで、段落を支える事例や理由を見付けることができるようになる。

**児童観** 前出の説明文『ミラクルミルク』は、新型コロナウイルス感染症対策による休校のため、その大半を家庭学習とした。学習したことを基に授業をしたが、子どもによる学習や理解度の差が大きかった。本題材を進めるにあたって、子どもは、「はじめ」「中」「終わり」という言葉は知っているが、形式段落や意味段落は知らない様子が見られた。日々の日記も形式段落を踏まえ、文毎に行を変えするなど段落のとらえに課題が見られた。その反面、日々の音読を通して、文章の内容の大体は把握しており、第1時で、『合図としるし』とは、何か」と問うと、「消防車や救急車のサイレンの音」、「信号の色」、「ゼッケン」などと容易に答えた。

**集団観** 新型コロナウイルス感染症対策のため、少人数での話し合い活動は控えている。そのため、全体で発表し、聞き合う活動に終始している。そこで、友達の意見を聞いて自分なりの考えをもったり、思いや考えを進んで発言したりすることができる集団をめざしている。そのためには、賛成、反対にかかわらず友達の意見につながりをもたせたり、話題が変わることを断ったりする言葉を付けて発表することや意見のやり取りと関連させながら意見を書くことで、友達の意見を尊重できることが大切であるとする。

**指導観** 筆者は、『合図としるし』と言いつつ、末尾では「合図やしるし」と述べている。しかし、これには伏線がある。文頭の「合図やしるしには、どのようなしゅるいがあり、わたしたちの生活の中でどのようにやく立っているのでしょうか」という問題提起の文と呼応した形となっているのである。すなわち、筆者は合図としるしについて、それぞれを述べた上で、それらの共通点を見いだそうとしているのである。そこで、あえて「合図」と「しるし」を分けてとらえさせることで、分ける必要がないことに気付かせたい。また、それを探っていく手がかりとして、指示する語句（「こ・そ・あ・ど言葉」）、接続する語句（「つなぎ言葉」）、形式段落、意味段落の学習を仕組むことで、主体的な学びを促したい。

3 単元の目標及び計画（全6時間）

■単元の目標

段落相互のかかわりや指示語に着目して、事例と理由を見付ける活動を通して、自分なりの考えや思いをもって筆者の主張について筆者の主張をとらえることができるようにする。

■単元の計画

第1次 説明文「合図としるし」について考える・・・2時間

第2次 段落相互の関係について考える・・・4時間（本時1／3）

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
文の中で用いられている指示する語句と接続する語句の役割、段落の役割について理解することができる。	段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係について叙述を基にとらえることができる。	言葉の役割と筆者の考えとの関係に気付くとともに、自分なりの思いや考えを伝えようとするすることができる。

## 5 本時の学習

■目標 意味段落に分けることで文章構成をとらえる活動を通して、文章構造の大体をつかむ。

■学習過程 ※(全)(小)(個):学習形態(全:全体の場合 小:小集団 個:個人) 評:評価の観点

学習事項	児童の活動	教師の働きかけとねらい	(集 団)
1. 学習課題への接近	(1) 前時までの学習内容を振り返る。	(1) 「こそあど言葉」、「つなぎ言葉」、「形式段落」、「意味段落」と板書して、どのようなものか問い、説明させることで、確認する。	(全) 既習内容について共通理解を図る。
2. 学習課題の設定	(2) 学習課題を設定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">                     筆者は、「終わり」だけ書けばよかったのではないか。                 </div>	(2) 意味段落「はじめ」「中」「終わり」に分けさせる。その上で、「終わり」が「まとめ」であることを伝え、筆者の主張をとらえさせることで、「中」の文章の役割に目を向けさせる。	(全) 学習課題を把握させる。
3. 学習課題の追求	(3) 筆者が、「中」を書いた理由を考える。 ・「このように」とあるので、前に書かれていたことと関係がある。 ・「さまざまなとくちょう」といっているけれど、これだけでは、どのような特徴かわからない。 ・「とくちょうを生かした場面や場所」もこれだけでは、よくわからない。 ・ここだけではわからないことが「中」に例を出して詳しく書いてあるから、「中」が必要だ。  (4) 筆者が、「はじめ」を書いた理由を考える。 ・「はじめ」は、詳しくしているわけではないけれど、必要だ。 ・「中」からいきなり始まったら、読みづらい。 ・「～でしょうか」ってあるので、読み手に質問しているのだと思う。 ・「では」は、話題を伝えるときに使うから、今から言うことを伝えるために書いているのだと思う。	(3) 「終わり」の一文を板書して、ゆっくり読み上げることで、「こそあど言葉」や抽象的な語句があることに気付かせる。 ・句読点で句切って読むことで、「このように」という語句に着目できるようにする。 ・「さまざまなとくちょう」、「それぞれのとくちょう」、「場面や場所」の語句を強調しながら読み上げることで、手がかりとなるようにする。  (4) 「中」に合図とするしの特徴が詳しく書いてあることを確認させることで、「はじめ」の役割をとらえさせる。 ・「はじめ」を読ませることで、どのようなことが書いてあるのかをとらえることができるようにする。 評「はじめ」や「中」の必要性について発言したり、書き留めたりすることができたか。(発言・ノート)	(全) ⇔ (個) 発表後に「本当か」と尋ね、挙手させることで個人の考えを反映する。  (全) ⇔ (個) 発表後に「本当か」と尋ね、挙手させることで個人の考えを反映する。
4. 本時のまとめ	(5) 学習を振り返り、次時への学習課題をもつ。	(5) 本時の学習を振り返らせ、次時に向けた見通しをもたせる。	(個) → (全) 次時の学習への意欲を高める。